

平安京右京三条一坊六町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一三

平安京右京三条一坊六町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊六町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび土地区画整理道路拡幅工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

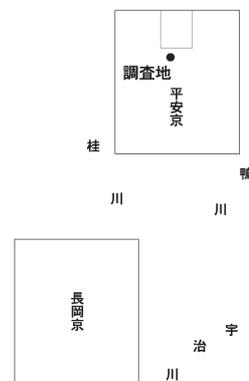
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京三条一坊六町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区西ノ京小倉町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）都市計画事業二条駅地区土地区画整理事業 施工者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼 |
| 4 調査期間 | 2006年7月18日～2006年9月15日 |
| 5 調査面積 | 約244 m ² |
| 6 調査担当者 | 布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子・調査担当者 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 布川豊治 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世 |



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 第1面	3
(3) 第2面	7
3. 遺 物	9
(1) 土器類	9
(2) 瓦類	12
(3) その他の遺物	13
4. ま と め	14

図 版 目 次

図版1	遺構	第1面遺構実測図(1:100)
図版2	遺構	第2面遺構実測図(1:100)
図版3	遺構	調査区南壁断面図(1:50)
図版4	遺構	調査区東壁断面図(1:50)
図版5	遺構	1 第1面検出状況(北から) 2 第1面全景(北から)
図版6	遺構	1 建物1(北から) 2 建物1:柱穴59・60(北から) 3 建物1:柱穴60・61(北から) 4 建物1などの完掘状況(北から)
図版7	遺構	1 第2面全景(北から) 2 埋納土壌98須恵器壺出土状況(東から) 3 柵1:柱穴107柱根検出状況(北東から)
図版8	遺物	出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南から）	2
図4	調査風景（南から）	2
図5	建物1実測図（1：50）	4
図6	建物2実測図（1：50）	5
図7	建物3実測図（1：50）	6
図8	柵1実測図（1：50）	7
図9	柵2実測図（1：50）	7
図10	埋納土壙98実測図（1：20）	8
図11	出土土器実測図（1：4）	11
図12	耕作関連土層出土土師器	12
図13	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	12
図14	銭貨拓影（1：1）・写真	13
図15	柵1柱穴107出土柱根実測図（1：4）	13
図16	柵1柱穴107出土柱根	13
図17	周辺の調査（1：1,000）	15

表 目 次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	9

平安京右京三条一坊六町跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、京都都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）都市計画事業二条駅地区土地区画整理事業の道路拡幅工事に伴うもので、1992年度の1次から数えて20回目の調査となる。調査地は京都市中京区西ノ京小倉町に位置し、平安京跡では右京三条一坊六町内の北西部に該当する。同六町は『拾芥抄』西京図によれば、右大臣藤原良相（817～867）の邸宅、「西三条第」にあたる。また当地は、弥生時代から古墳時代の遺物が出土する壬生遺跡の一部でもある。

六町域の既往の調査では、1995年度調査（8次、図17参照。以下同じ）と2001年度調査（17次）で洲浜を伴う池跡の東岸と西岸を、1998年度（14-4次）と2000年度調査（15次）では柵列と掘立柱建物を検出している。これらの遺構は、1町規模の邸宅跡を示す園池や建物であり、平安時代前期の遺構と推定されており、「西三条第」に関連するものと考えられている。今回の調査地は、2001年度調査（17次）の北側に隣接し、池跡の西岸より北西側にあたることから、建物跡などの検出が予想され、池の洲浜の延長が検出される可能性も考えられた。

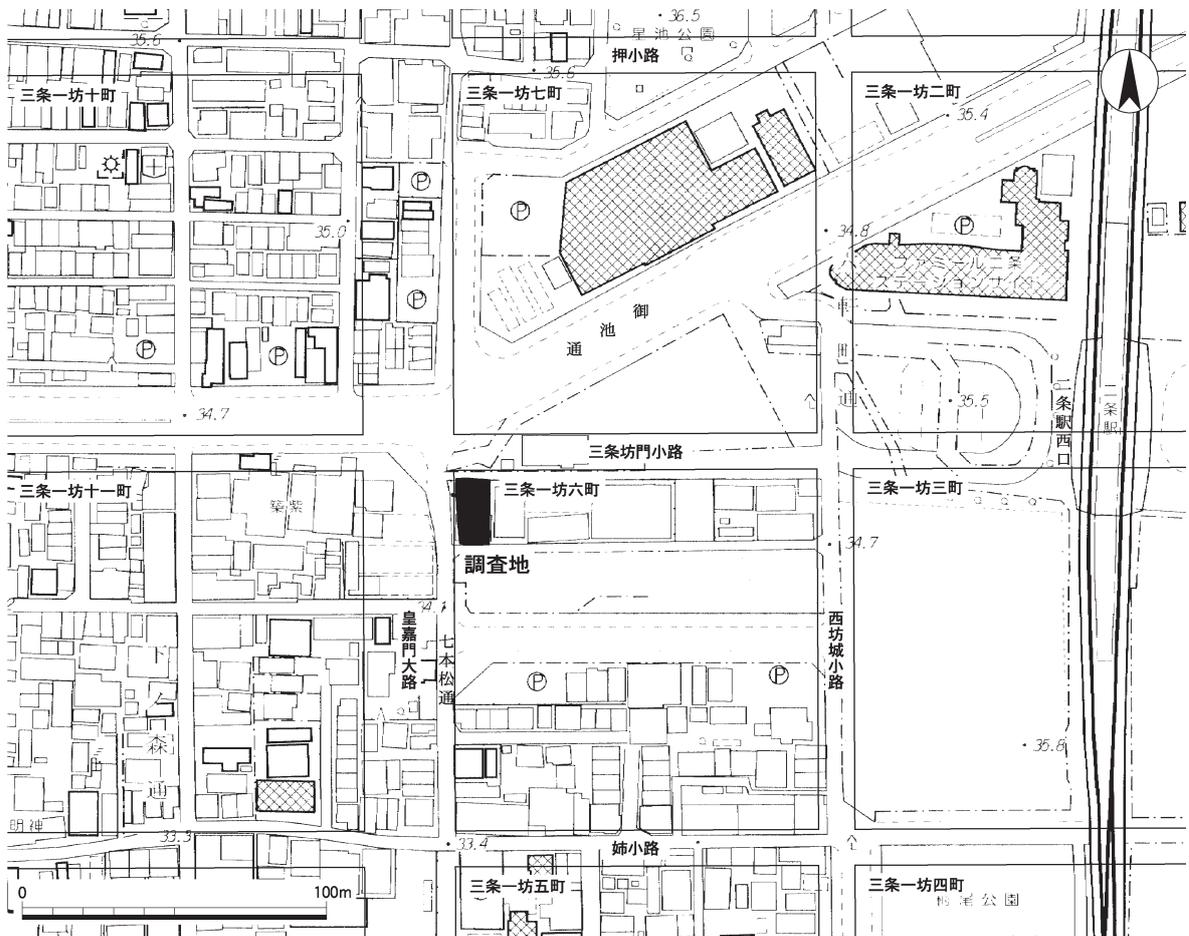


図1 調査位置図（1：2,500）

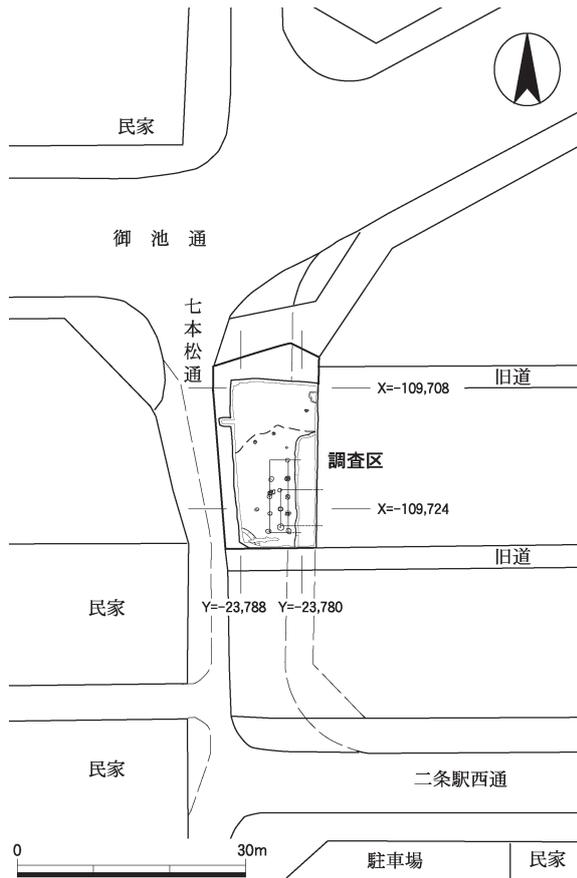


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 調査前全景 (南から)



図4 調査風景 (南から)

調査区は現道路に対する控え部分と下水管部分を除いた、東西約 11 m、南北約 22 m のほぼ方形 (約 241 m²) に設定し、2006 年 7 月 18 日より調査を開始した。最初に機械掘削により、盛土および耕作土層を除去したところ、耕作関連の溝、一部瓦を伴う柱穴群と、時期差が考えられる 2 つの整地土層で形成された遺構面を検出した。この遺構面を第 1 面とし、手作業による調査を進めた。まず中世から近世と考える耕作関連の小溝などを完掘した後、平安時代の遺構の調査を進め、次に第 1 面の基本土層である整地土を除去し、第 2 面を検出した。同遺構面では平安時代初頭頃の柱穴などの遺構を検出している。これらの遺構を掘り下げ、記録作業などを実施し、調査区の埋め戻しや器材搬出などを含めて、調査は 9 月 15 日に終了した。

なお皇嘉門大路に関連する遺構を検出するため、調査区西辺の一部分を幅約 1.5 m で西へ 2 m ほど (約 3 m²) を拡張したが、それらの遺構は確認できなかった。

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の現地表面は、ほぼ平坦で標高 34.2 m 程である。基本土層は、調査区南壁（図版 3）では現地表面から、現代盛土層（厚さ 0.8 ～ 0.9 m）、近世から近代の耕作土層（厚さ 0.2 ～ 0.3 m）、中世から近世の耕作土層（厚さ 0.1 ～ 0.2 m）、平安時代前期の黒色砂泥層の整地土層（厚さ 0.05 ～ 0.15 m）であり、その整地土層の上面が第 1 遺構面となる。この整地土層とレベル的にはほぼ対応する調査区東壁沿いの幅約 2.5 m の落込み 72 とした部分は、西側より時期が新しい平安時代中期初頭の整地土層である。以下は地山である混礫砂泥層や灰色シルト層などになる。第 2 遺構面は、地山直上に形成されている。調査地の地山上面は、北西（標高約 33.1 m）から南東（標高約 32.9 m）へ緩やかに下がり、0.2 m ほど低くなる。

(2) 第 1 面（図版 1・5）

平安時代前期の柱穴群（柱穴 A 群）と整地土層などを検出した。その他、中世から近世の耕作関連の小溝、近世から近代の土壌なども検出した。

柱穴 A 群は第 1 面の整地土 2 上面で検出した柱穴群であり、柱穴群のなかから後述する南北棟（建物 1）および東西棟（建物 2）が復元できた。出土遺物から 9 世紀中葉頃に成立し、9 世紀末から 10 世紀初頭頃には廃絶したとみられる。

整地土 1（落込み 72） 調査区東壁沿いの南半部において東西 2.5 m 以上、南北 15 m 以上、厚さ 0.05 ～ 0.15 m を測り、調査区外の南と西に広がる。土層は礫混じりの黒色砂泥である。出土遺物から 10 世紀初頭ごろに整地された土層と考えられる。

整地土 2 調査区南側の 2 / 3 程を占め、整地土 1（落込み 72）に東側の一部が切られる。東西約 10.5 m、南北 16 m 程の幅で確認しており、南方へは厚さを増して延びるが、調査区が同六町西限際であることから、西側は大きく広がらないと考えている。土層は礫混じりの黒色砂泥であり、整地土 1 より黒色味が強い。出土遺物から 9 世紀中葉頃までには整地されたと思われる。

建物 1（図 5、図版 6） 調査区中央部南側で、東西 1 間×南北 4 間分を検出した。東西 2.4 m（8 尺）、南北の柱間 2.4 m（8 尺）等間の掘立柱建物である。柱穴の径は 0.5 ～ 0.8 m、深さは 0.1 ～ 0.3 m を測る。柱穴 59・60・61 の埋土上層には瓦片が多数含まれる。これらの瓦片は、検出状況から、建立時の根固めではなく、廃棄時にこの建物あるいは近辺からの瓦が埋ったものとする。建物

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期 ～中期初頭	掘立柱建物、柵列、柱穴群、土壌、整地土層	柱穴群、整地土層には新旧がある。
中世～近世	土壌、耕作関連溝、耕作土層	耕作関連溝は東西溝が多い。

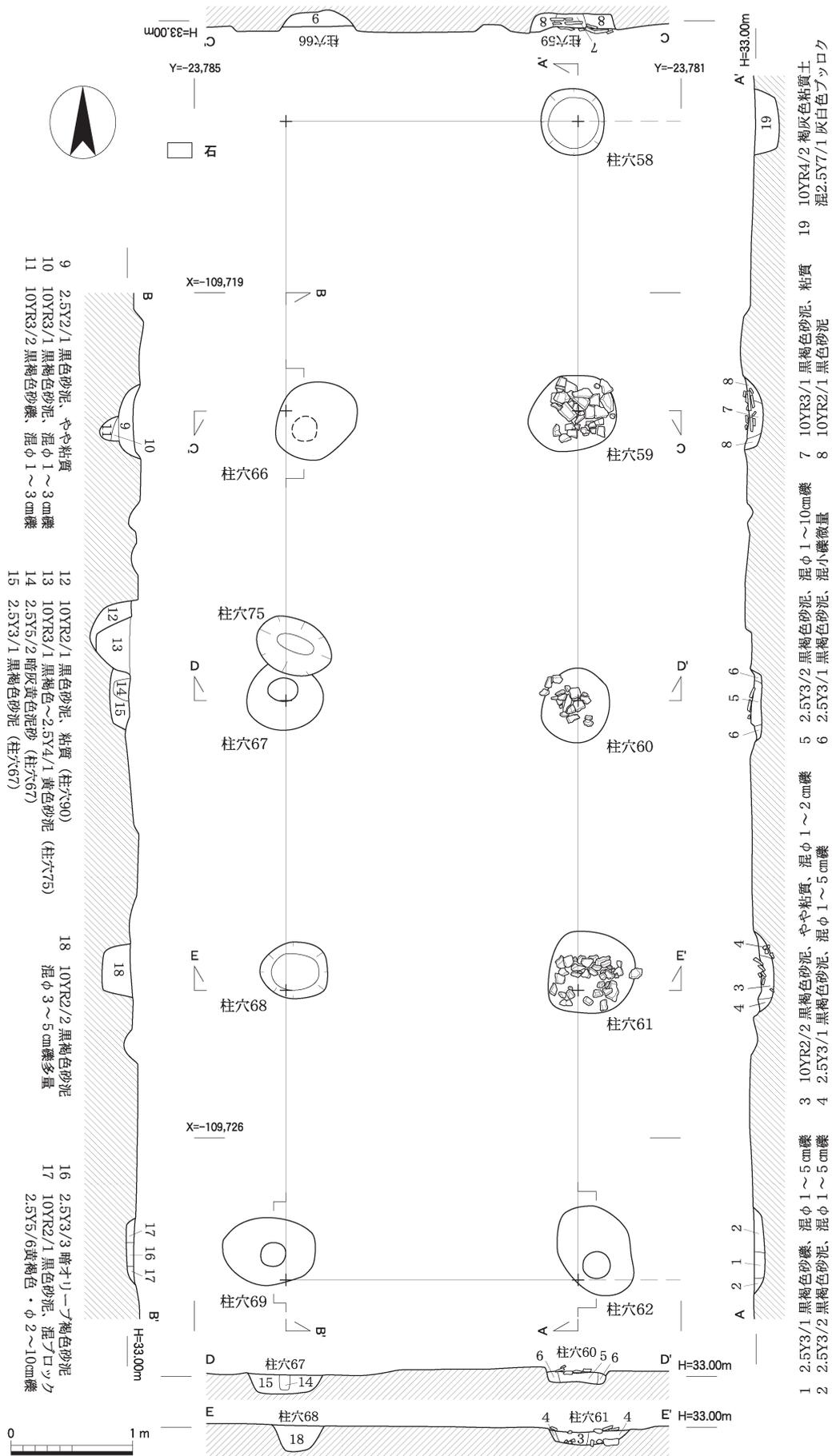


図5 建物1実測図 (1 : 50)

の北西隅にあたる範囲では、柱穴などは検出されなかった。なお建物1は、東西1間のみで東に続く柱穴が検出されなかったが、柱穴59・60・61を身舎の妻と考えれば、東西棟（四面庇）の西庇部分にあたる可能性も残る。

建物2（図6）調査区南東部で、南北2間×東西2間分を検出した。柱間は南北2.4m（8尺）、東西2.1m（7尺）の掘立柱建物である。柱穴の径は0.6～0.8m、深さは0.3～0.4mを測る。この建物は、南北2間×東西2間以上の東西棟の建物とみられる。

土壌93 調査区南西隅で検出した。東西2m以上、南北2m以上、深さは約0.15mを測る。

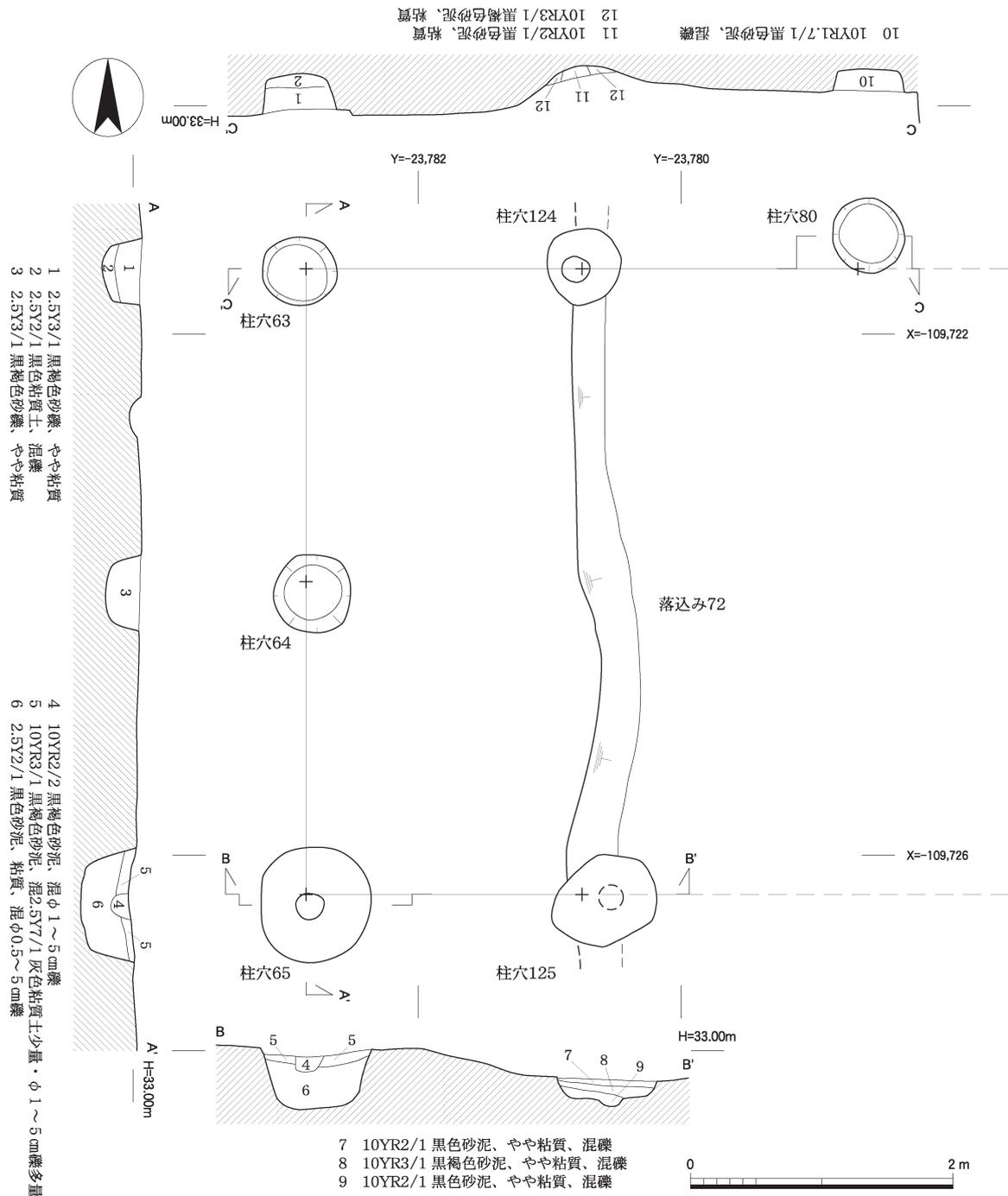


図6 建物2実測図（1：50）

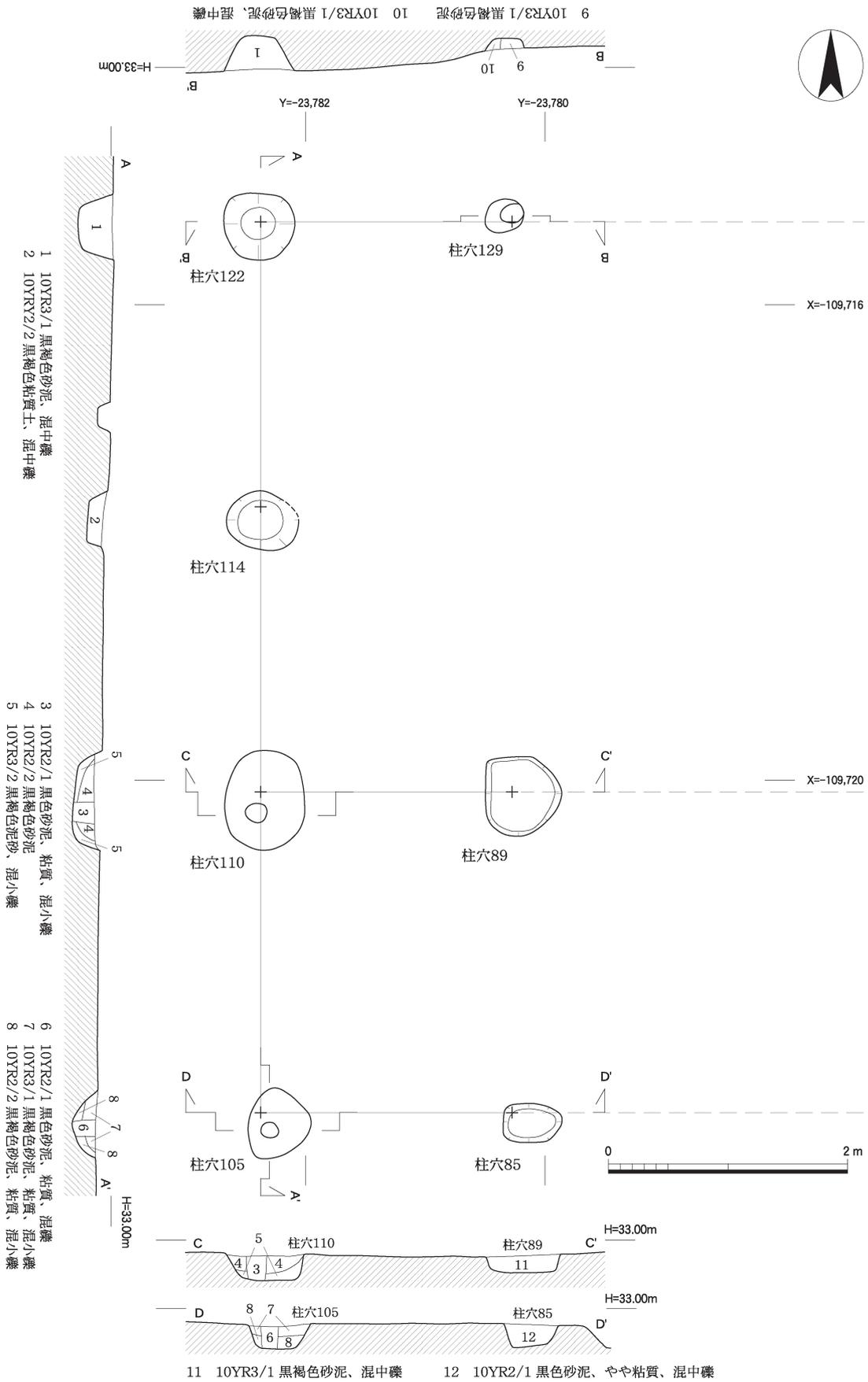


図7 建物3実測図 (1:50)

埋土は黒褐色砂泥であり、後述する土層 94 の上層に広がる。

(3) 第2面 (図版2・7)

地山直上の面であり、柱穴群 (柱穴B群) や土層などを検出した。

柱穴B群のなかから後述する建物3および2条の柱穴列(柵1・柵2)が復元できた。柱穴B群は、出土遺物から8世紀末から9世紀初頭頃に形成され、9世紀前半の内に廃絶したと考えられる。

建物3 (図7) 調査区中央部東側で、南北3間×東西1間分の掘立柱建物を検出した。柱穴の径は0.3～0.8 m、深さは0.1～0.3 mを測る。柱間は、柱穴122・114・110の南北2間は2.4 m (8尺)、柱穴110・105の間は2.7 m (9尺)である。東西の柱間は2.1 m (7尺)である。この建物は、東に続く柱穴を検出できなかったが、南側1間分を南庇とする東西棟である可能性が考えられる。

柵1 (図8、図版7) 調査区中央部西寄り検出した。南北約6 mあり、柱穴が8基並ぶ。柱穴の大きさは一定ではなく、深さは0.15～0.2 mを測る。柱間は1.65 mほど (5.5尺)で、柱

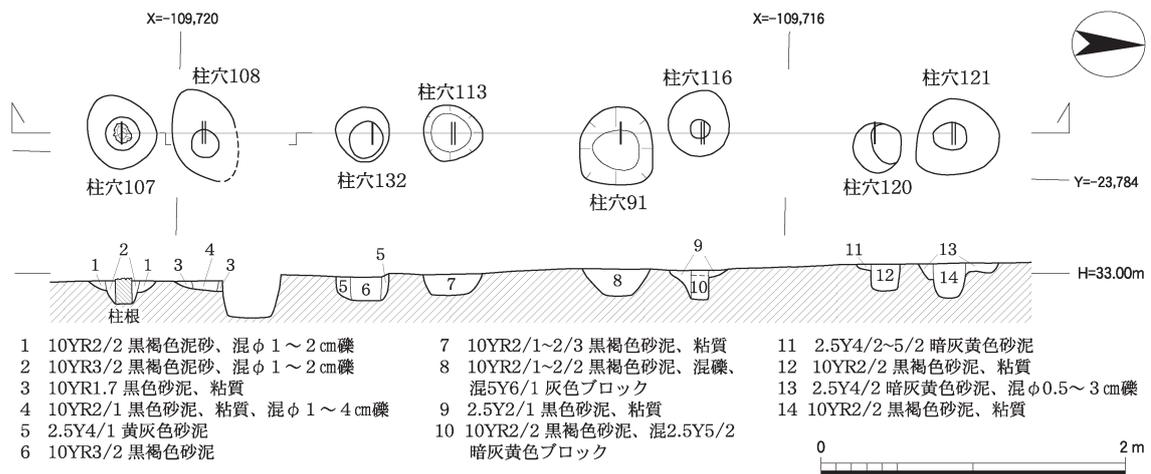


図8 柵1実測図 (1:50)

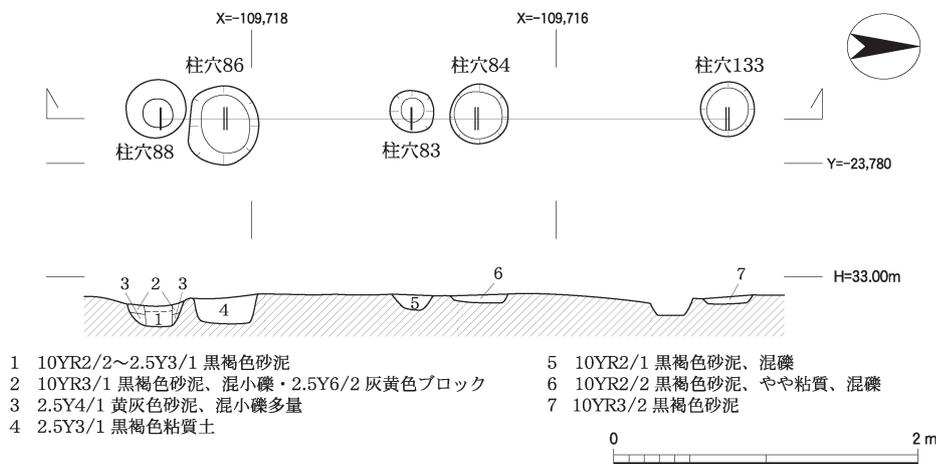


図9 柵2実測図 (1:50)

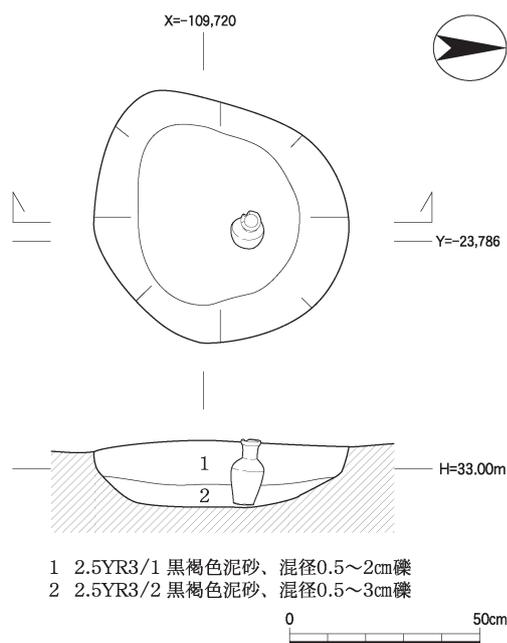


図 10 埋納土壙 98 実測図 (1 : 20)

痕が残る。南北のズレは作り直したためと思われるが、出土遺物に大きな時期差がみられないため、前後関係は不明である。

埋納土壙 98 (図 10、図版 7) 調査区中央部西側で検出した。長径約 0.7 m、短径約 0.6 m の楕円形であり、深さ約 0.2 m を測る。埋土は黒褐色砂泥であり、ほぼ完形の須恵器壺が、直立に近い状態で出土した。第 2 面で検出した建物 3 に伴う可能性があるが、出土した須恵器壺の年代幅から第 1 面の建物 1 に伴う可能性も残る。

土壙 94 調査区南西隅で検出した。東西 1.4 m 以上、南北 2 m 以上、深さは約 0.15 m を測り、調査区外の南と西に広がる。埋土は黒褐色粘質土である。2001 年度調査 (17 次) で確認された旧期池の北西部において、取水していたと考えられる流路状の遺構が検出されている。土壙 94 としたが、その遺構から続く、北東肩部を含む流路状遺構の北東辺を検出したものとみられる。また前述した土壙 93 の下層埋土である可能性もある。

穴 107・132・91・120 と柱穴 108・113・116・121 の 4 基ずつに分かれ、南北に約 0.55 m ズれている。柱穴 91・113 は柱痕を検出できなかった。南北のズレは作り直したためと思われるが、出土遺物に時期差がみられないため、前後関係は不明である。なお南端の柱穴 107 には柱根 (檜) が残る。

柵 2 (図 9) 調査区中央部東寄りで検出した。南北約 4.1 m あり、柱穴が 5 基並ぶ。柵 1 とほぼ同じ 1.65 m (5.5 尺) ほどの柱間で、柱穴 88・83 の 2 基と柱穴 86・84・133 の 3 基に分かれ、南北のズレは約 0.45 m である。2 基の柱穴列は径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m を測り、3 基の柱穴列は径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m を測る。2 基の柱穴列は 3 基の柱穴列より規模が小さく、柱穴 88 のみ柱

3. 遺 物

遺物は、整理箱で 31 箱出土した。内訳は、土器類が 24 箱、瓦類が 6 箱ほどであり、木製品は 1 箱である。古墳時代の遺物も少量出土しているが、平安時代と江戸時代の 2 時期のものが大半を占め、その他の時期のものは少数にとどまる。平安時代の遺物は、前期のものが多数を占め、平安時代中期初頭以降に比定されるものは出土量が大きく減少する。中世の遺物は、少量で小片のものが、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入白磁と青磁・瓦などが出土している。近世の遺物は、染付磁器・施釉陶器が多く出土し、他に土師器・瓦・磁器なども見られる。

(1) 土器類 (図 11・12、図版 8)

耕作土などから出土した近世のものを除いた遺物は、平安時代前期のものが大半を占める。土師器が最も多く出土し、ついで須恵器が多い。黒色土器や緑釉陶器の椀皿類などの出土量は多くはなく、灰釉陶器も壺などが少数みられるのみである。同期のものでは他に製塩土器片なども出土している。土師器は杯・皿・椀・高杯・甕、黒色土器は杯・甕、須恵器は杯・鉢・壺・甕などが出土した。それらの中から、比較的残存状態の良いものを図示した。

土壇 70 出土土器 (1) は土壇 70 から出土した須恵器であり、古墳時代の有蓋高杯と考える。受け部は外方のやや上に伸び、杯底部外面の脚接合部付近には放射状の幅約 1 mm、長さ 5 mm の短く浅い刻みが認められる。

土壇 94 出土土器 (3) は土壇 94 から出土した土師器蓋である。口縁端部は小さく丸味を帯びる。外面はヘラミガキであり、内面はナデ調整で黒色の付着物が残る。平安京 I 期に属し、8 世紀末から 9 世紀初頭に比定される。

柱穴 B 群出土土器 (4～6) は柱穴 B 群から出土したもので、平安京 I 期に属し、8 世紀末から 9 世紀初頭に比定される。

(4・5) は土師器皿で、(4) は建物 3 の柱穴 110、(5) は建物 3 の柱穴 85 から出土した。

表 2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
古墳時代	須恵器	少量	須恵器 1 点	少量	0 箱
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、製塩土器、軒瓦、瓦類、土製品、木製品	20 箱	土師器 15 点、黒色土器 2 点、須恵器 6 点、緑釉陶器 2 点、灰釉陶器 1 点、軒平瓦 4 点、木製品 1 点	15 箱	1 箱
中世以降	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、染付、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、骨製品、土製品、木製品	14 箱	土師器 3 点、銭貨 1 点	8 箱	6 箱
合 計		34 箱	36 点 (4 箱)	23 箱	7 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 3 箱多くなっている。

体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部はつまみあげられ肥厚する。内面はナデ調整、外面はヘラケズリである。(6)は須恵器杯で、柱穴100から出土した。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は丸く収まる。内外面とも回転ナデ調整である。

埋納土壙98出土土器(7)は埋納土壙98から出土したほぼ完形の須恵器壺である。頸部から直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反し丸味を帯びる。外面は回転ナデ調整である。底部はナデ調整を加えているが糸切り痕がわずかに残る。平安京I期に属し、9世紀前半に比定される。

整地土2出土土器(8~12)の土師器・須恵器・緑釉陶器は、整地土2から出土したものである。その時期は、(8~10)が平安京I期に属し、9世紀前半に、(11・12)が平安京I期新~II期古に属し、9世紀中葉に比定される。

(8)は須恵器蓋である。天井部中心を欠く。口縁部は屈曲し、端部は下方へ突出する。天井部中心にわずかにツマミを貼り付けた際のナデ痕跡が認められることなどから、ツマミが付くと考えている。(9)は須恵器杯である。底部から角をもって体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面は回転ナデ調整、底部はヘラケズリであり、貼り付け高台である。(10)は土師器甕である。内傾する体部は頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部はやや外反し、端部は巻き込んで収める。口縁部内面は横方向のハケ目が残る。体部内面はナデ調整、口縁部外面は縦のハケ目調整、頸部にも横ナデ調整を施す。(11)は土師器甕である。内傾する体部は頸部外面に段が付き、「く」の字状に屈曲する。口縁部はやや外反し、端部は丸味を帯びる。口縁部内外面は横方向のナデ調整、体部内面はナデ調整、体部外面はタタキ痕を残し、頸部にも横方向のナデ調整を施す。(12)は緑釉陶器の椀であろう。磨滅が激しいが、底部以外の内外面に釉が所々認められ、平高台である。外面に黒色の付着物(煤か)が認められる。

柱穴A群出土土器(2・13~25)の土師器・黒色土器・須恵器は、柱穴A群から出土したものである。その時期は(13~19)が平安京I期に属し、8世紀末から9世紀前葉に比定され、この時期のものが出土遺物の大半を占める。(2・20~22)は平安京I期~II期に属し、9世紀前半に、(23~25)は平安京II期古に属し、9世紀中葉に比定される。

(2)は土師器椀である。口縁部はつまみ小さく収まる。内面はナデ調整で外面はヘラケズリである。(13~15)は土師器皿である。口縁部はなだらかに立ち上がり、端部はつまみあげられ肥厚する。内面はナデ調整、外面はヘラケズリである。(16~18)は土師器杯である。(16・17)は体部がわずかに内傾して立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。(18)は口縁端部がわずかに丸く肥厚する。3点ともに内面はナデ調整、外面はヘラケズリである。(19・20)は黒色土器A類杯である。体部はなだらかに内傾して立ち上がり、(19)は器壁がやや厚い。口縁端部は丸く収まる。内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリを施す。外面に黒色の付着物(煤か)が認められる。(21)は須恵器壺蓋である。天井部はほぼ平坦であり、中心に宝珠形のツマミが付く。口縁部は下方に折れ、やや内傾している。口縁端部断面は三角形状を呈する。天井部外面はヘラケズリのあと宝珠形ツマミを貼り付けて形成している。口縁部内外面はナデ調整である。(22)は須恵器鉢である。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は外傾する面をなし、上・下端が少し突起する。体部から口

縁部の内外面とも回転ナデ調整である。(23・24)は土師器杯である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く肥厚する。口縁部外面から内面はナデ調整、体部外面はオサエである。(25)は土師器碗である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部はつまみ上げ丸く収まる。口縁部外面から内面はナデ調整、体部外面はオサエである。(21)は建物2柱穴63、(13・15・19・20)は建物2柱穴64、(14・18・25)は建物2柱穴65、(2)は建物2柱穴80、(17)は柱穴76、(16・23・24)は柱穴90から出土した。

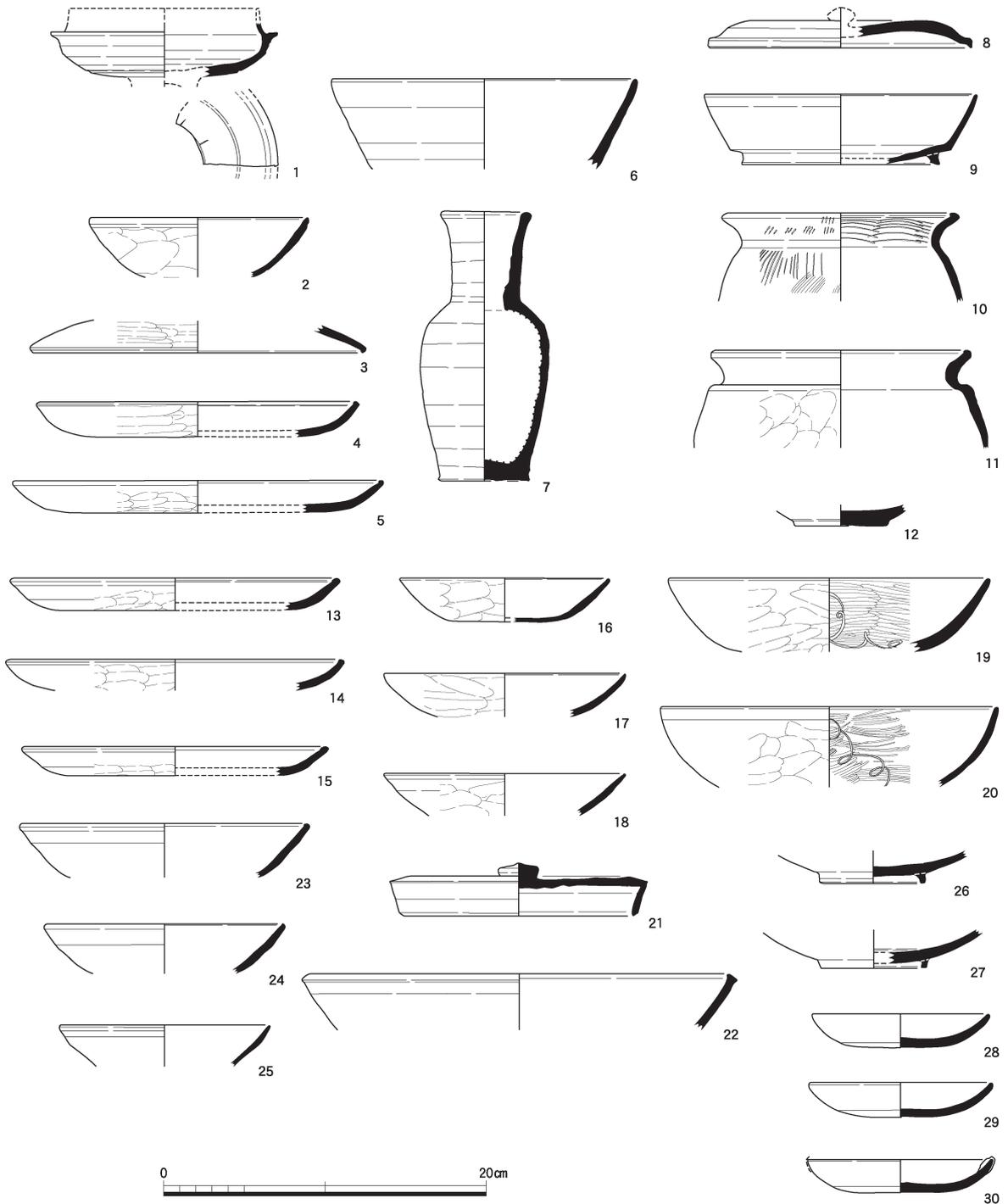


図 11 出土土器実測図 (1 : 4)



図12 耕作関連土層出土土師器

整地土1（落込み72）出土土器 整地土1の出土遺物は小片が多く、平安京I期に属する8世紀末から9世紀前葉のものが大半を占めるが、平安京II期に属する9世紀中葉から後半のものも少量ある。また10世紀代に入るものもわずかながら認められる。その中から残存状態の良好なものを2点図示した。

た。

(26)は灰釉陶器皿である。断面台形状の高台が付く。底部内面は施釉し、輪状の重ね焼きの跡が残る。底部外面は回転ケズリ、体部内外面は回転ナデ調整である。時期は9世紀末から10世紀初頭に比定される。(27)は緑釉陶器皿であろう。断面方形形状の高台が付く。底部内面には幅2mmほどの浅い圈線がある。底部外面をのぞき釉が施される。磨滅のため調整は不明瞭である。時期は9世紀末から10世紀初頭に比定される。

耕作関連土層出土遺物（28～30）は調査区中央部西側から、重なった状態で出土した土師器皿である。底部と体部の境は不明瞭でなだらかに体部が立ち上がる。口縁端部はつまみ上げ丸く収まる。底部外面を除きナデ調整である。ナデ跡の状況から回転ナデとも考えられるが、内外面に黒褐色の付着物が多量に付き、特に口縁部が顕著であり、断定は難しい。大量の煤と思われる付着状態から灯明皿と考えられる。時期は江戸時代中期以降か。

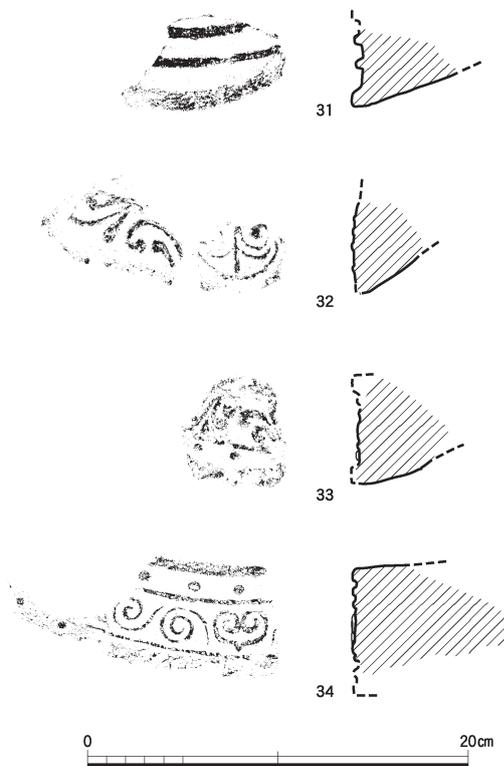


図13 軒平瓦拓影・実測図（1：4）

(2) 瓦類（図13、図版8）

瓦類は、耕作関連の溝と耕作土から出土した近世のものと平安時代のものに大別できる。平安時代の瓦類は、大半が平瓦であり丸瓦は少量である。軒瓦は、軒丸瓦が1点、軒平瓦が5点出土した。また緑釉熨斗瓦も1点出土している。それらのうち近世のものを除いた残存状態の良いものを図示した。(31)は耕作関連土層から出土した重郭文軒平瓦である。小片のため型式は特定できないが、難波宮式である。焼成はややあまく、胎土の色調は、にぶい黄橙色を呈し、胎土は小粒が微量混じる。搬入瓦か。(32)は耕作関連溝から出土した唐草軒平瓦である。磨滅が激しいが、中心飾りなどが残存する。中心飾りは下方に開く五葉形と見える。焼成はあまく、胎土は細かい砂粒が微量混じるが良好であり、色調は浅黄橙色である。中心飾りと唐草文の配置から、平城宮式⁴⁾6694Aと考えられる。(33)は整地土1から出

土した唐草文軒平瓦である。唐草文はやや肉厚である。焼成はややあまく、胎土は細かい砂粒が混じるが良好であり、色調は暗緑灰色である。小片であるため特定できないが、同文瓦と考えられるものが西賀茂瓦窯⁵⁾から出土している。(34)も整地土1から出土した唐草文軒平瓦である。中心飾りは花頭形であり、その基部は尖頭形である。唐草文はそれぞれ離れて巻き込み、外区には珠文を配する。焼成はややあまく、胎土は小礫が微量混じるが良好であり、色調は、にぶい黄橙色である。同文の軒平瓦が西鴻臚館の推定地である平安京右京七条一坊⁶⁾から出土している。平安時代前期か。

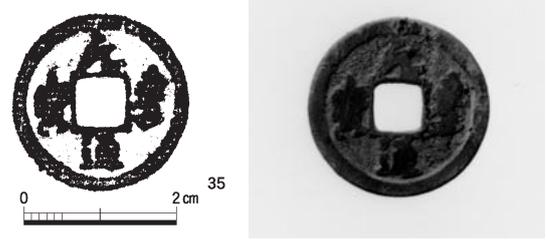


図14 銭貨拓影(1:1)・写真

(3) その他の遺物(図14～16)

その他に耕作土から銭貨が、また柵1の柱穴107から柱根が出土した。

銭貨(図14)(35)は第1面検出中に耕作土から出土したものである。径約2.4cm、重さ約2.9gある。磨滅が激しいため判読しがたいが、「元豊通寶」(行書)と見える。

柱根(図15・16)(36)は柵1の柱穴107に残存していた柱根で、用材は檜である。長さ18cm以上、径13cm前後あり、底面の外周近くに一辺約1cm、高さ約1.5cmの突起がある。

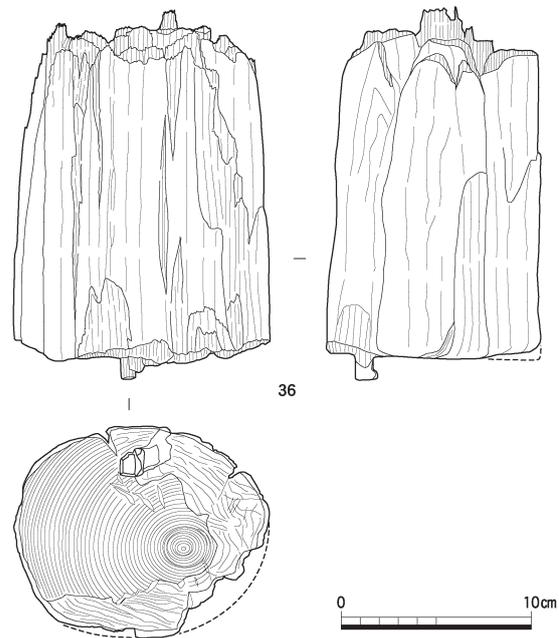


図15 柵1柱穴107出土柱根実測図(1:4)



図16 柵1柱穴107出土柱根

4. ま と め

右京三条一坊六町の既往調査⁷⁾では、園池と洲浜、建物などを検出している。調査成果によると、洲浜を伴う池は9世紀初頭頃に成立し、9世紀後半に改修され、10世紀頃まで存続している。建物は東西六間の規模で、9世紀前半（平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古）であり、園地や建物の規模、出土土器の構成などから一町全域を占める有力な邸宅であろうと報告されている。そして同六町は『拾芥抄』西京図によると平安時代前期の右大臣藤原良相（817～867）の邸宅、「西三条第」（「百花亭」とも称する）の推定地のひとつ（『拾芥抄』「三条北朱雀西、良相大臣家」から同四町の説もある）であり、検出した遺構群は、その「西三条第」の有力な推定地である可能性を報告している。

今回の調査では、それぞれ新旧のある整地土1・2と柱穴A群・B群、建物などを検出した。地山直上の第2面で検出した柱穴B群（建物3、柵1・2など）は9世紀初頭には廃絶し、その後、早くも9世紀前半には整地土2が整地されている。整地土2は、上面に柱穴A群（建物1・2など）が9世紀中葉頃成立し、9世紀末から10世紀初頭には廃絶したと考える。柱穴A群は、六町東側で検出した主要建物とほぼ時期が対応する。整地土1は、柱穴A群の廃絶前後の10世紀初頭頃に整地されている。調査地内では整地土より上の層には顕著な遺構は確認できず、後世の耕作土に覆われている。

調査地は同六町内の北西隅であるが、平安時代初頭から宅地などに利用され、中期の早い時期まで土地利用が継続しているが、その後は耕作地化が進み、近代まで続くことが明らかとなった。

註

- 1) 図17は、平尾政幸・山口 眞『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5 2002年に記載の図2を元に、周辺の既調査の加筆し、作成した。
- 2) 平尾政幸・山口 眞『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5 2002年
- 3) 出土土器の年代については、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀 -』（有）京都編集工房 2005年に準拠した。
- 4) 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996年
- 5) 近藤喬一他『平安京跡研究調査報告第4集 西賀茂瓦窯跡』財団法人古代学協会 1978年。図版64-4・5の角社西群瓦窯から出土した軒平瓦と同文と思われる。
- 6) 鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年 および『平安京跡発掘資料選（二）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986年に掲載の参考図版20-223と同文である。
- 7) 註2)の同書および伊藤 潔「平安京右京三条一坊2」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年（8次）、伊藤 潔「平安京右京三条一坊1」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年（14-4次）

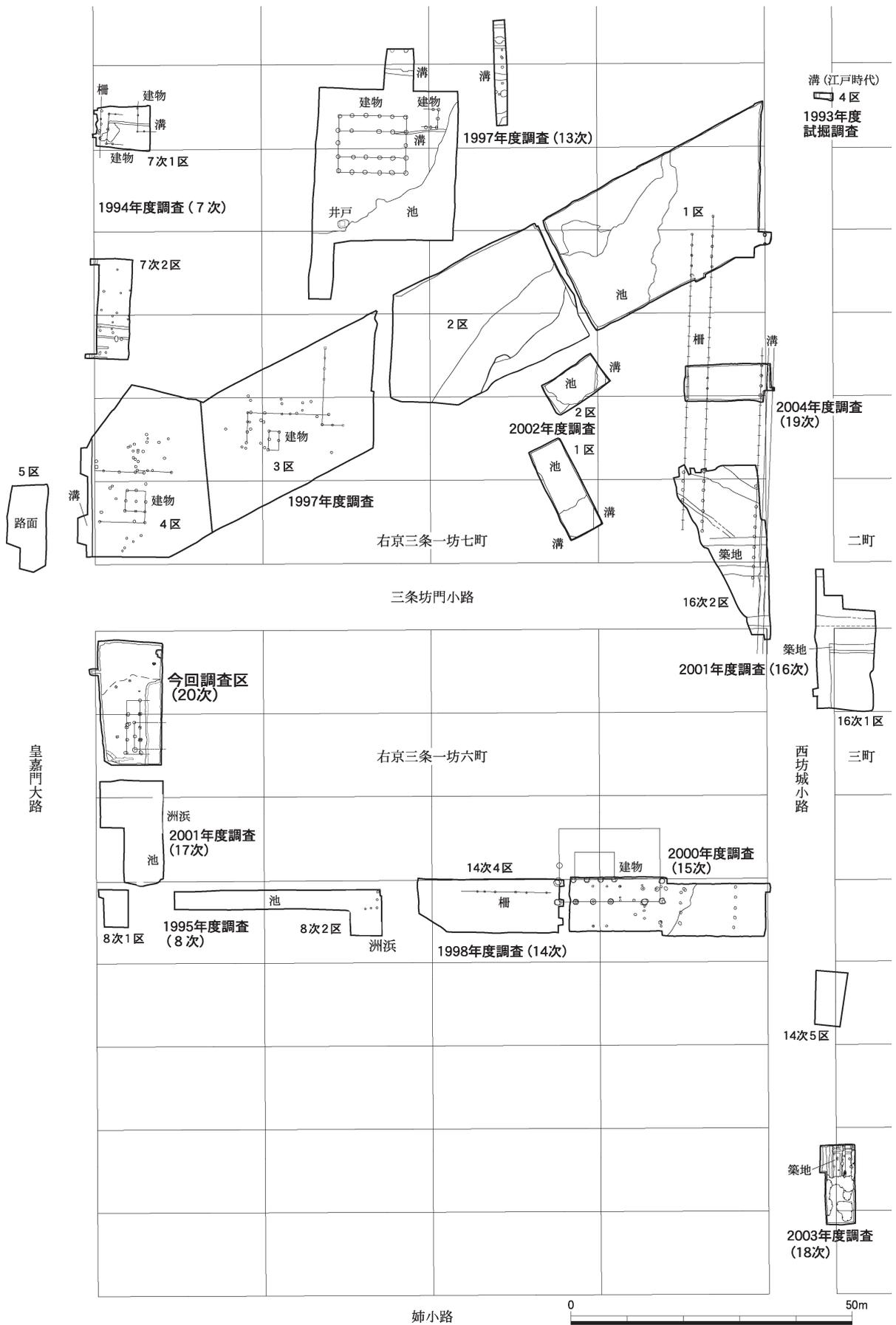


図 17 周辺の調査 (1 : 1,000)

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうろくちょうあと							
書名	平安京右京三条一坊六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-13							
編著者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼう 三条一坊 ろくちょうあと 六町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうおくろちょう 西ノ京小倉町 ちない 地内	26100		35度 00分 38秒	135度 44分 22秒	2006年7月 18日～2006 年9月15日	約244m ²	土地区画 整理道路 拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 三条一坊 六町跡	都城跡	古墳時代		須恵器				
		平安時代前期 ～中期初頭	掘立柱建物、柵列、 柱穴群、土壇、整 地土層	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、軒瓦、瓦類、製 塩土器、木製品		柱穴群と整地土層 には新旧2時期あ る。		
		中世～近世	土壇、耕作関連溝	土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、磁器、 染付、輸入陶磁器、瓦 類、銭貨、金属製品、 骨製品、木製品、				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-13
平安京右京三条一坊六町跡

発行日 2006年11月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961